

こころの玉手箱

文化人類学者

須藤 健一

3

「きみら、10年以内に学位(博士号)を取るか、倒れん本を出さなあかん。でない」と助教授にしてやらん」

国立民族学博物館の開館時、梅棹忠夫館長は私たち助手十数名にこう宣言した。世界に秀でた博物館をめざそうという梅棹流の若手鼓舞だ。「10年」という期限に戦慄した。

梅棹さんは人類学者であり、卓抜した構想力を持つ知の巨人だ。名著「文明の生態史観」、「知的生産の技術」などでも知られる。弁が立ち、組織力と政治力にもたけていた。国立民族

学博物館は、事実上、梅棹さんが創設した。

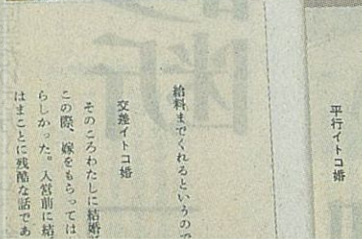
文系の博士号の学位といえ、1970年代半ばには、大学教授が退職前に取る人生へのご褒美、というのが通り相場だった。少壮のまま論文を提出するのは、母校の学位序列を乱す狼藉に等しい。

かたや、倒れない本とは、ひとかどの出版社から、それなりに厚みのある民族誌を出すことだ。構想力・筆力はもちろん、編集者との信頼関係を築くことが前提条件となる。

いずれも、研究者といえども難局を自力で切り開く



梅棹忠夫さんの自伝



単行本の「平行イトコ」は、その後「交差イトコ」に訂正された (表紙写真は文庫版)

誤り指摘、先達に一矢報いる

才覚が必要で、いわば経営者のセンスを磨け、というメッセージに受け取れた。

思えばこの梅棹マジックに鍛えられた。独創性のないものを嫌い、ひとまねを許さない厳しさ。論文を見てもらうと、「オリジナリティーがないなあ」とひとことで切り捨てるか、たちどころに瑕疵を見つけて容赦ない指摘を浴びせる。

そんな怖い先達、梅棹さんの自伝「行為と妄想」に、私は誤りを見つけた。後に文庫にもなったが、単行本の方だ。

ご夫人との婚姻にふれたくだりで、「交差イトコ」とすべきところを「平行イトコ」としていたのだ。得意顔で指摘すると、本人は「おお、そうやったか」とさばさばしたものだ。「さすが社会人類学の専門家やな」と軽くなされた。出ばなをくじかれ、拍子抜けした。

それでもあの梅棹さんに一矢報いてやった。改訂版をみるたびにそう思う。